

明治大学博物館広報誌

MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 81

Archaeology

特集

明治大学博物館の 特定テーマ別コレクション

NEWS / 展示 Zoom in! / 博物館研究最前線 / 収蔵室から / M2 カタログ



右上から反時計回りに、神奈川県千代廃寺出土「大伴五十戸」銘軒丸瓦(清地良太撮影)、方格規矩鏡、伝関東取締出役鉄製銀流し十手(名和コレクション)、関原合戦画卷(部分・内藤家文書政道氏寄贈6-5)、染錦竜鳳柘榴間取文八角鉢(12代酒井田柿右衛門・作)、大津絵《瓢箪で鯰》(部分・久保田米僊・画)

刑事



寛永15年(1638)9月13日
江戸幕府老中連署奉書(きりしたん禁制のこと)
【内・増補(2)老中奉書1-29】



延岡城下家中屋敷割図【内3-23-11-35-5】

3 大名文書 内藤家譜

内藤家は、三河時代からの徳川家の譜代の家臣で、上総国佐貫などに領地を与えられた後、元和8年(1622)から陸奥国磐城平7万石、延享4年(1747)から日向国延岡7万石を治めた大名である。内藤家文書は、磐城平藩での二代目の藩主となる内藤忠興以降、近代までの記録で、譜代大名家の記録としては残りがよく、数は約5万点に上る。

忠興時代以降の老中奉書を始めとする幕府関係の記録、延宝2年(1674)から始まる「万覚書」(国元の日記)や正徳2年(1712)から始まる「万覚帳」(江戸の日記)、藩領域の絵図といった藩政関係の記録、藩士の履歴をまとめた「由緒書」など家臣関係の記録や内藤家の家にかかわる記録など、内藤家文書の内容は多岐にわたる。なお、表紙の人物は、忠興の祖父内藤家長。



上:伝江戸町奉行所同心捕者出役長十手
下:伝火付盗賊改方十手

時代考証家の故名和弓雄氏が収集した捕者道具コレクション。刺又、突棒、袖搦などの捕者三道具や十手、捕縛時などに使われる縄や呼び笛、鎖鎌や寄棒など全体で250点ほど。十手は29点あり、伝火付盗賊改方十手や伝世田谷代官大場弥十郎所用十手など、使用者が趣向を凝らした華やかな十手も伝わっている。伝江戸町奉行所同心捕者出役長十手や伝東取締出役鉄製銀流し十手(表紙写真)などは常設展示室で展示中。

4 名和コレクション

商品1 精陶社資料

2015~2020年度にかけて受贈した176点の陶磁資料。1930~50年代に銀座七丁目に店舗を構えた精陶社という陶磁器販売代理店が取り扱った商品群である。櫛高台の付いた染付の鍋島焼や鍋島家の杏葉紋を窯印とする製品(35点)、第十二代酒井田柿右衛門による染錦手作品と「柿右衛門作」銘の食器類(30点)、および佐賀・長崎県下の資料16点でおおよそ半数近くを占める。それ以外に、真葛香山窯製の食器類、京焼、美濃焼などがあり、近年盛んになった明治期の陶磁史に続く時期の研究にとって貴重な素材となり得る資料群である。



染付桜御所車文皿(鍋島焼)



色絵紅葉文井鉢
7代高橋道八(京焼)



犬棒かるた
(1852年・嘉永5頃)



染付陶彫
《獅子の子落とし》
1950~60年代頃
平戸焼

時田昌瑞ことわざコレクション

ことわざ研究の第一人者である時田昌瑞氏が半生をかけて収集した品々である。2008・2009の両年度に受贈した資料は1450点にのぼり、ことわざカルタをはじめとするカルタ類と、ことわざを画像表現した絵画や印刷物、立体として表現した彫刻、ことわざの画像を意匠とした工芸品・生活資料等で構成されている。これらの資料からは、ことわざが口承やテキストとして伝承されるばかりではなく、画像として非常に豊かな表現方法が生み出され、なおかつ人々の生活空間の隅々にまで沈着していた歴史を看取することができる。

特集

明治大学博物館の 特定テーマ別コレクション

博物館の収蔵資料には、一点ずつ古物商などから買い集めたものももちろんありますが、全体で数万、数十万、それ以上という資料群になると、遺跡単位の出土品、家系や共同体あるいは法人の資産として伝世したもの、篤志家・好事家の蒐集品、学術研究の過程で収集・採集された資料や標本など、まとまった数のコレクションを一括で受贈したり、また有償譲渡を受けたという経緯の積み重ねによってきます。当館の45万点を超える収蔵資料もまた、90年を越える館史の中でそうした動向の下に形成されてきたものであり、今回の特集では館蔵の主要コレクションを紹介し、展示室に並んだ状態からは窺い知れない、館蔵資料形成に関わる来歴の一端をご覧いただくこととします。

企画展「東国の古墳文化の実像を求めて —大塚初重と明大考古学—」を開催



昨年7月に逝去された、元明治大学考古学博物館長・明治大学名誉教授である大塚初重氏の古墳研究と明治大学考古学研究室の歩みを振り返る企画展を5月27日から8月7日まで開催しました。卒業論文の草稿や土器の実測器具といった氏の遺品のほか、登呂遺跡をはじめとする明大考古学黎明期の関係資料、千葉県能満寺古墳など大塚氏が手掛けた発掘調査遺跡の出土資料、明治大学考古学博物館や明治大学リバティアカデミーにおいて生涯教育に尽力した姿を紹介しました。壁画が描かれた茨城県虎塚古墳の石室の実物大模型や映像コーナーで流された1997年の最終講義なども好評を博し、8525名に来場いただきました。多くの方々が「大塚先生」を偲び、あるいは新たに知っていた場となりました。



茨城県虎塚古墳の石室の実物大模型

南山大学人類学博物館との交流事業

@名古屋

南山大学人類学博物館会場
花押・印章 — 内藤家文書を中心に —
●会期 10月17日(火)～11月25日(土)
内藤家の当主の花押や花押型、蔵書印に加え、秀吉の朱印状、家康時代の駒曳朱印が押された伝馬手形などを展示します。

サメ漁具



@東京

**明治大学博物館
常設展示室(商品部門)会場**
オセアニアの民族造形
— 故今泉隆平氏のコレクションから —
●会期 10月17日(火)
～11月25日(土)

明治大学博物館と南山大学人類学博物館の協定事業の一環として、南山大学人類学博物館において当館所蔵資料を、当館において南山大学人類学博物館所蔵資料を紹介する展示会をおこないます。

考古5 鏡コレクション

三角縁神獸鏡
(伝京都府物集女)



「高砂」
文字入
蓬菜文柄鏡

①原始・古代日本との比較研究を目的として収集した古代中国の鏡、②古墳時代の日本の鏡、③平安～江戸時代の日本の鏡で構成されており、総数約90面にのぼる一大コレクションである。①は、戦国期から唐代(約2400～1000年前)にかけてのもので、日本の弥生時代の墓から出土する草葉文鏡・異体字銘帯鏡・内行花文(連弧文)鏡・方格規矩鏡や、古墳から出土する夔鳳鏡・画文帝神獸鏡など漢代・三国代の鏡が充実しているほか、壁画で有名な奈良県高松塚古墳や正倉院宝物で知られる海獣葡萄鏡などもある。鏡は墓・古墳の年代や被葬者の性格を知る上で重要な副葬品であり、貴重な比較研究の資料である。②では、2面の三角縁神獸鏡が特筆される。同鏡は大きく2種に分類され、古段階のものは中国製、新段階のものは日本列島製と考えられてきたが、図像が鮮明で厚手の伝京都府物集女出土資料は前者、図像が不鮮明で薄手の出土地不明資料は後者の好例である。③は江戸期に大量生産された柄鏡が多く、家紋のほか松竹や鶴・亀・洲浜が加わった蓬菜文、夫婦円満を示す「高砂」の文字など縁起の良いデザインが配されており、嫁入り道具などに使われた状況をよく示している。

6 前場幸治瓦コレクション



三三桐文軒丸瓦(伝大坂城)

『古瓦を追って—相模国分寺、千代台廃寺考—』などの著書で知られる瓦研究者の前場幸治氏から2010年に寄贈された、総数1万点におよぶ国内屈指の内容をもつ瓦コレクションである。かつて前場工務店代表取締役を務め、親子三代にわたる大工・棟梁でもあった前場氏が約40年にわたって収集した資料は、①日本国内の古代(飛鳥～奈良時代)の瓦、②日本国内の中世～近現代の瓦、③中国・朝鮮などアジアの瓦(古代～現代)、④現代の瓦製作の道具及び屋根材などからなり、特に①と②は日本の瓦の歴史が凝縮されていると

も言える充実した内容を誇っている。特筆されるのは文字が刻まれた稀少な「記銘瓦」の一群で、このうち神奈川県千代廃寺の「大伴五十戸」銘軒丸瓦は、古代の地方行政単位である「里」に相当する「五十戸」の文字が記されている国内で2例目の貴重な資料である。このほか、国内で瓦が導入された飛鳥時代の資料や、平城京・東大寺、全国の国分寺の瓦などがある。中世以降では、表面に金箔が施されていた痕跡が残る豊臣時代の「大坂城の五三桐文軒丸瓦」や、小田原城攻めで築かれた一夜城である石垣山城の一括資料、瓦職人の技術の粋が込められた近現代の鬼瓦群がある。



千代廃寺軒丸瓦の「大伴五十戸」銘
(文字部分を加工。清地良太氏撮影)

展示 Zoom in!

収蔵庫のとおっておき

— 知られざる逸品の数々 —

会期：2023年1月28日(土)～3月11日(土) 主催：明治大学博物館

館藏品展を実施するにあたり、企画として何か新味を出したいということから、資料実物の展示とオンライン上の情報発信を組み合わせた展覧会として開催しました。

04年6月)以降のバックナンバーの閲覧を促すこともねらいとした。

この展覧会の出展品は、当館の広報誌『ミュージアムアイズ』に収録された「収蔵室から」という連載記事に取り上げられた館蔵資料の数々だった。資料全体(2023年3月31日時点で45万1200点)からすれば、実際に展示室で見られるのは、ほんのわずかな点数(現在は約2千点)にすぎない。この連載は、普段は収蔵室にあつて公開されていないが、注目に値する館蔵資料を紹介しようというコンセプトではじまった。展示ケース内にQRコードを配置して、ウェブ公開している36号(20

これは博物館に全般的な傾向だろうが、体系立ったシナリオに沿って構成される常設展示の中には、どうしても組み込み難い資料は多数存在し、企画展などのコンセプトからもこぼれ落ちる資料がある。その意味では、そうした死蔵品になりかねない資料を公開する機会を今後も考慮すべきである。また、展示資料のラインナップは、記事の執筆者個々の問題関心に基づく選択ゆえにバラバラな印象をまぬかれなかったが、反面、当館の収蔵資料体系が実に多様性に富んでいることのアピールになったのではないだろうか。

ミュージアムアイズ
バックナンバーはこちらから！

2004年
～
2014年
(36～63号)



2015年
～
2023年
(64～最新号)



商品部門 展示風景



考古部門 展示風景



刑事部門 展示風景

◆商品部門

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
二風谷アットゥン テーブルセンター(絵入り)	53号、米村 創2009 「樹木の皮で作られた織物」
二風谷アットゥン テーブルセンター(刺繍品)	
二風谷アットゥン テーブルセンター(無地)	
高岡漆器 勇助塗 銘々皿	44号、吉田賢治2006 「高岡漆器」
高岡漆器 彫刻塗 色紙箱	
知覧傘提灯	78号、林田真由子2022 「知覧傘提灯」
尾張七宝 紅白梅文飾皿工程見本	73号、林田真由子2019 「製造工程見本」

◆考古部門

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
杉田遺跡の土器	72号、海沼真澄2019 「杉田遺跡の土器」
亀ヶ岡式土器(亀ヶ岡遺跡)	67号、海沼真澄2016 「縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器」
中広形銅矛	54号、忽那敏三・山路直充2010 「前場幸治コレクション」
「大伴五十戸」銘 単弁蓮華文軒丸瓦(千代廃寺)	
五三桐文軒丸瓦(伝大坂城)	
大黒天の鬼瓦(和歌山県)	
単弁蓮華文軒丸瓦(海会寺)	68号、森本尚子2017 「前場幸治瓦コレクション 飛鳥時代の瓦②」
複弁蓮華文軒丸瓦(本薬師寺)	
偏行唐草文軒平瓦(藤原宮)	
均整唐草文軒平瓦(大官大寺)	55号、森本尚子2010 「平城宮の軒丸瓦」
複弁蓮華文軒丸瓦(平城宮)	
複弁蓮華文軒丸瓦(平城宮)	76号、遠藤瞳子2021 「水の文字の鬼瓦」
「水」文 鬼瓦	
チャンカイ文化の土器(ペルー)	53号、田口 慎2009 「ペルーの土器～チャンカイ文化～」

◆刑事部門

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
東叡山文珠楼焼討之図	71号、勝見知世2018 「浮世絵と錦絵～当館所蔵の錦絵から～」
乍恐以書付奉願上候	69号、高野美佳2017 「「乍恐以書付奉願上候」 — 帳外の息子とその父の一件 —」
里見八犬伝之内芳流 閣之図	39号、高野弘之2005 「錦絵『里見八犬伝之内芳流閣之図』」

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
会津張子「赤べこ」	51号、稲葉久実2008 「赤物玩具」
井波彫刻「獅子頭」	
鹿児島神宮信仰玩具 綱車	
中野土人形「綱乗り恵比寿」	
三春張子 達磨	70号、林田真由子2018 「仙台埋木細工」
埋木細工「鷹」	
埋木細工 端書入	65号、海塚有理2015 「陶磁器人形瀬戸ノベルティ」
瀬戸ノベルティ 「古代少女口マン」オルゴール	
瀬戸ノベルティ 「農夫」	37号、織田 潤2004「松川だるま」
松川だるま	

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
ネアンデルタール人の幼児 化石人骨(レプリカ)(シリア)	46号、佐藤紘子2006 「デデリエ洞窟出土ネアンデルタール人の幼児化石人骨レプリカ」
青銅製鼎(中国)	43号、佐藤剛大2006「青銅鼎」
肥前産京焼風陶器 (明治大学記念館前遺跡)	68号、岡地智子2017「記念館前 遺跡出土の肥前産『京焼風陶器』」
泥面子 (明治大学記念館前遺跡)	49号、田口 慎2007 「明治大学記念館前出土 泥面子」
神子柴型石斧 (茨城県鹿島郡造谷)	40号、飯田茂雄2005 「神子柴型石斧」
ミニチュア土器(雨滝遺跡)	60号、古豊裕次朗2013 「雨滝遺跡のミニチュア土器」
シャチ(サカマタ)の歯 (貝柄塚貝塚)	79号、南雲 茜2022 「シャチと縄文人のつながり」
「高砂」銘 蓬萊紋柄鏡	66号、伊藤友香子2016 「高砂文字入蓬萊柄鏡からみる 和鏡の意匠」
青銅金銀緑松石象嵌帯鈎 (中国)	74号、川嶋陽子2020 「古代中国の帯鈎」
赤像式スキュフォス(酒杯) (ギリシア)	63号、土谷あゆみ2014 「古代ギリシア陶器黒像式エグザレイ プトロンと赤像式スキュフォス」
黒像式エグザレイプトロン (香油・芳香薬入れ)(ギリシア)	

資料名	掲載(ミュージアム・アイズ)
口演写 騒立人要求書	77号、勝見知世2021 「幕末期の浪人・無宿人たち」
甲州北山筋西八幡村御検地 水帳	50号、佐藤賢一2008 「貞享元年(1684)8月 甲州北 山筋西八幡村御検地水帳」
裁許留	57号、小野孝太郎2011 「江戸時代の裁判記録からみえて くる村の暮らし 裁許留」



揺らぐ「伝統」の定義

越前漆器(福井県)発の革新

外山 徹 (商品部門学芸員)

2016年以来、コロナ禍をさきみ、大学創立者出身地自治体との社会連携という趣旨に沿うべく、商品部門ではそれらを産地とする伝統的工芸品資料の充実に努めた。矢代操の出身地福井県鯖江市は経済産業大臣指定の伝統的工芸品(略称:伝産品)「越前漆器」の産地である。1980年代後半から1990年代初めにかけてのバ



福井県鯖江市河和田地区の遠景

ブル景気の下では、金時絵・沈金といった加飾による高級品が動いたが、その後は「転じて低調となった。代わって、天然漆を塗った質感を生かしての普段使いの器が、愛好家層をターゲットに販売される動向が出た。この実用に重きを置いた商品開発は、当然ながら現代的な生活スタイルを意識するものとなり、古式のイメージから離れる傾向もあつたが、2011年の特別展「漆器 JAPAN WARE—漆器の過去・現在・未来—」でも、輪島塗(石川県)、山中漆器(同)、川連漆器(秋田県)における動向に注目した。その後、商品部門の調査研究は陶磁器に軸足が移り、2017年1月に鯖江市河和田地区を訪れるまでには、しばらくのブランクが生じていた。

カラフルな漆器の衝撃

本格的に河和田を訪れるようになったのは、RENEWという工芸イベントを視察した2018年10月からとなる。この時、産地の中で最も先端的な部分に触れて衝撃を受け、インターネットで他産地の動向を粗々調べると、多かれ少なかれ同じような動向を示していることが看取できた。

傍目にもよくわかる変化はコラーブルー、オレンジ、ピンクといったカラフルな色漆が目立った点である。漆器の色は黒か朱が縄文時代以来の定番である。緑やベ

合成漆器への再評価

ジユ(白漆と称される)はあるにはあつたが、漆絵を表現する際に用いられる程度で、丸ごと塗ることはほほない。この動向を牽引するのは、江戸時代中期から続く老舗の製造販売元、株式会社漆琳堂である。デザイン転換の契機となった aisomocosomo というシリーズは、プロダクト・プロデューサーの丸若裕俊氏との提携によって開発されたコップ(湯呑み)にはじまる。2010年の株式会社中川政七商店が主催する見本市への参加が販路拡大の契機となり、椀類を中心とするシリーズを立ち上げた。斬新な色使いに対する周囲の懸念をよそに好調な売れ行きを見せ、鯖江市のふるさと納税返礼品にもなっている。2020年からのコロナ禍においても売上げは堅調で、インターネット販売の伸張を支えていた。

また、先に輪島や川連で注目した、必ずしも昔ながらの形状ばかりにとらわれない、機能本位のデザインがなされる傾向も当然ながら顕著で、このことはユーザーが純然たる和食の食膳をイメージする層ばかりではなく、全くそれにとらわれないスタイルを追求する人々に拡がっていることを意味するだろう。



aisomo cosomoの後継として、現在、漆琳堂が展開しているRIN&COシリーズ。good design company代表の水野学氏がブランディングデザインを担当しており、現代の伝産業界ではこうした外部人材との提携が顕著となってきた。株式会社漆琳堂公式サイトから

ず、そのため、飲食店・旅館の業務用に活路を見出した。現在では、伝産品を継承しつつ、業務用プラスチック食器の産地としても独自の地歩を固めている。家庭用業務用を問わず、現在、汁椀として一般的に使用されているのは代用漆器あるいは合成漆器と言われるもので、プラスチック素地にウレタン塗装をほどこしたものが、あるいはオガ屑を合成樹脂で固めて成形した木粉樹脂の器胎を用いるもの(木合)もある。当初は旺盛な需要に供給が追いつかないため、量産の効く代用品として開発された合成漆器は、価格が低廉化するとともに漆器をまねたものの、まがいものという見方となり、また、実際に塗膜の剥落など耐久性も低く、粗悪品のイメージがあつた。そのため、プラスチックや木粉樹脂の器胎には当然ウレタン塗装がなされるものと思っていたが、河和田では木粉樹脂に天然漆をほどこしていることに意外の感があつた。そこには、天然木地では加工のしにくい、あるいはできない形状を表現する素材として木粉樹脂を積極的に位置付ける姿勢があつた。つまり、合成漆器を安価な代用品としてではなく、デザイン性の高い食器として捉え返しているわけで、複雑な成形を可能とする技術は、元来、合成漆器による業務用食器を多く生産してきた河和田ならではのノウハウが生きていと言えよう。また、樹脂の品質改良や塗装技術の向上はめざましく、もはや粗悪品という印象ではない。

主要な漆器産地が、実際には生産高の多くを合成漆器に負っている現状に鑑みれば、伝産品を礼賛するばかりでは産業としての実態を理解することはできないう。和食器文化の継承という点で合成漆器の果たしている役割を軽視すべきではない。合成漆器は伝統的工芸品(伝産品)の指定要件を満たさないため、小売りの現場では「越前塗」などの表示で販売されている。河和田を訪れて印象付けられたことは、伝産品そのものはかりではなく、その周辺から優れた製造技術が派生し、高品質なモノ作りがおこなわれている点である。昔ながらの伝産品を存続させるための「産地」という母体を維持する上では、最高峰に位置する伝産品だけに注目するのではなく、その裾野部分を堅実に固める商品に正当な評価を与え、現実に即した産業としての持続性を考慮する必要があるだろう。

* * *

このような動向は、2008年のリーマンショックによる景気停滞と経営者の世代交代が重なる中、生き残りかけた新たな商品開発の模索から生まれたようだ。従来のイメージにとらわれない、新たなスタイルの追求は、必然的に現代のライフスタイルを強く意識するものとなり、結果として三〇〇四〇代という、従来は伝統工芸のユーザーとしてイメージされなかった世代の関心を集めることにもなった。

「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定されて来年で半世紀。我が国における「伝統」の概念を規定してきた「西欧近代化」が始まってから1世紀半が過ぎた。近代という時代における物事の変化のスピードを考えれば、前近代における時間経過と対比して150年は決して短い年月ではない。その150年を含めて工芸品の歴史とすれば、「伝統」という定義が揺らぎつつあることが感じられる。

【参考】
漆琳堂公式サイト <https://shitsurindo.com/>
さばえの仕事図鑑【漆琳堂 vol.3/5】
アート・工芸・デザイン3つの領域へ。漆琳堂のブランディング。 <https://sabee-job.jp/shitsurindo3/>
(いずれも2023年9月22日最終アクセス)

「御腰物帳」と鈴木加賀守貞則

矢口 結菜

内 藤家文書の中には、「御腰物帳」と呼ばれる刀剣を管理するための台帳が宝永7年(1710)^{※1}、明和5年(1768)^{※2}、文化15年(1818)^{※3}の3点存在する。この「御腰物帳」にはどのようなことが書かれているのだろうか？最初に書かれた宝永7年の「御腰物帳」を見てみよう。この資料は、現在国宝になっている短刀の包丁正宗から記載が始まり、古刀や新刀などすべて合わせると172口の刀剣が記載されている。

ここでは、ここで写真1^{※4}を用いながら、主な記載内容を見てみよう。まず、①には刀剣の種類が記されている。②ではその刀剣の銘が記され、③には刀身の長さが記されている。また、写真にはないが、刀剣によっては代金や折紙^{※5}についても記載されていることがある。④には数が記載されている。⑤では目貫や縁などの拵について細かく記述されている。そして、⑥のように通し番号や刀剣の出入りなどの加筆も見られる。

ところで、②の銘に注目していくと、鈴木加賀守貞則なる人物により、「鈴木加賀守」・「加賀守貞則」・「鈴木貞則」などと銘を切られた刀剣が10口登場する。鈴木加賀守貞則は、警城平藩時代の内藤家お抱えの刀工であった。

鈴木貞則は、「万覚帳」^{※6}からも確認することができる。享保4年(1719)11月、8代将軍徳川吉宗から命を受けた老中久世重之が、大名家に対し領内に住む刀工の調査をするよう申し渡した。この返答の書付が、同資料の同月20日条に残されている。ここでは、警城平藩に住む刀工として「奥州警城平城下 鈴木加賀守貞則」と「奥州警城平城下 根本八三郎国虎」の名前を挙げている。「日本刀工刀銘大鑑」^{※7}では鈴木貞則について、宝永7年3月に、幕命で朝鮮国王へ贈る雑刀を初代国虎と共に選ばれ、鍛えたことが書かれている。



↑写真2「万覚帳」(内藤家文書1-7-7)

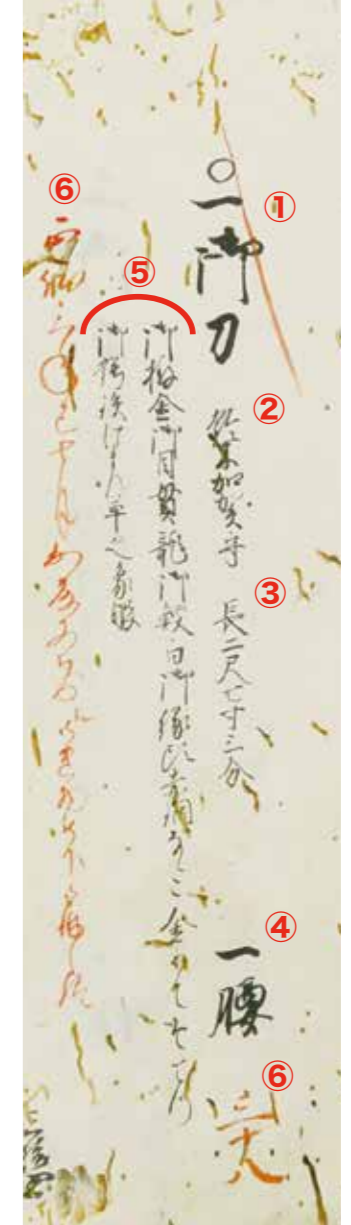


写真1「御腰物帳」(内藤家文書2-3-15)→

ている。実際「万覚帳」に記された幕府への返答の中にも、朝鮮へ送る雑刀を作るよう命令された者であること、今も作刀していることなどが記されている^{※8}。

以上のことから、内藤家は幕命を受けるほどの良工を抱えていたことが分かる。また、こうした事実を知ることができるのも、多くのの人々の努力で内藤家文書が今日に伝わっているからなのである。

- ※1 「御腰物帳」内藤家文書2-3-15。(明治大学博物館蔵)
- ※2 「御腰物帳」内藤家文書2-3-41。(明治大学博物館蔵)
- ※3 「御腰物帳」内藤家文書2-3-87。(明治大学博物館蔵)
- ※4 註1前掲資料より。写真内の数字は執筆者が付け足した。
- ※5 刀剣の鑑定書の事。
- ※6 「万覚帳」内藤家文書1-7-7。(明治大学博物館蔵)
- ※7 飯田一雄2016『日本刀工 刀銘大鑑』淡交社。
- ※8 ただし「万覚帳」では、その年号を「正徳年中」(1711~1716)としている。

- 〔参考文献〕
- ・飯田一雄2016『日本刀工 刀銘大鑑』淡交社
 - ・久保恭子監修2014『図解 日本の刀剣』東京美術
 - ・辻本直男補注2023『図説 刀剣名物帳(縮刷版)』雄山閣
 - ・西口正隆2021「近世大名家における刀剣管理と記録作成—常陸国土浦藩土屋家を事例に—」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第17号
 - ・深井雅海2018『刀剣と格付け 徳川将軍家と名工たち』吉川弘文館
 - ・明治大学刑事博物館編2003『明治大学刑事博物館資料 第18集 明治大学所蔵「内藤家文書」の世界』明治大学刑事博物館

大室古墳群第195号墳出土 無脚雲珠

南雲 茜

馬 は日本列島に元々生息していたわけではなく、5世紀頃に朝鮮半島の人々が連れてきたのが始まりだと言われている。中世や近世では農耕や運搬の面において生活には欠かせない身近な存在だった一方で、古墳時代では馬を様々な馬具で飾り、権力者がそれに乗ることで権力の大きさを示した。

馬を扱うための手綱や鞍のほかに、飾るための馬具(杏葉辻金具^{※1})が副葬品として古墳の埋葬施設からみつかった。今回紹介する長野県大室古墳群第195号墳出土の「無脚雲珠」もそのひとつである(写真1)。

大室古墳群は、5~8世紀にかけて全長10~30m程度の小規模な古墳が約500基築造された大型の群集墳である。明治大学では1950年代に後藤守一教授が調査を行い、1980年代から90年代にかけて大塚初重教授らが再調査を行った。

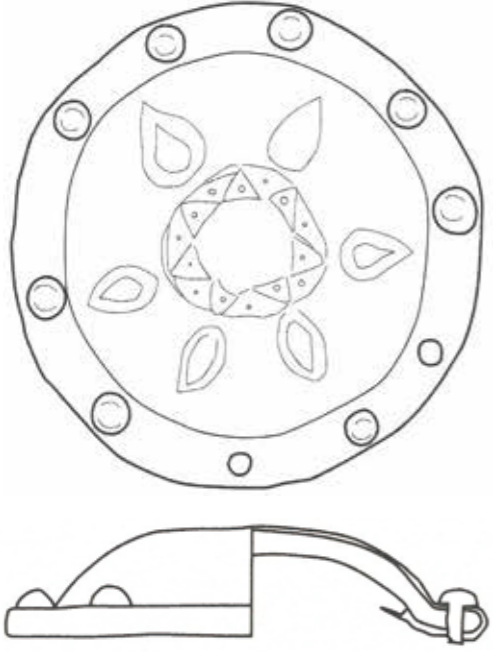
雲珠は、馬の尻にかけるベルトの交差部分を固定する金具である。ベルトを固定するための突起部分(脚)があるものは有脚雲珠と呼ばれている^{※1}。しかし、当館が所蔵する無脚雲珠は脚がない。この資料で確認はできないが、ベルトの痕跡がみられる無脚雲珠がほかの遺跡で見つかっているため、有脚の雲珠と同じ役割を果たしていたものと考えられる。

この雲珠は鉄地金銅張(一部鍍金が残る)で10個の鉢が等間隔に配置され、直径約6センチと小型で、蓮華文が鉢の頂部に直接刻まれているのが特徴である(図1)。

群馬県少林山台遺跡12号墳でも文様が似た無脚雲珠が出土している。馬具が伝わったのは、馬が日本列島に導入された時期とほぼ同時と考えられるが、無脚雲珠が初めて登場したのは6世紀前半と少し遅れている。雲珠の大きさは、時代が下るにつれ大きくなり6世紀後半を境にまた小型になる。加えて文様は時代が下るにつれて簡略化されていく。これに照らして、この無脚雲珠は6世紀末から7世紀初頭にかけてのものといわれている。

大室古墳群の出土遺物は須恵器・玉類・土師器など多くあるが、その中でも馬具や馬の歯、馬形土製品といった馬に関連する資料が多いのが特徴だ。これは『延喜式』^{※2}の信濃十六牧のひとつ「大室牧」の起源ではないかと指摘されており、馬や馬具の生産と関わりがあった人物がいたことを示唆している。

第195号墳で3点の無脚雲珠が出土したが、本資料を除く2点に文様は見られない。仮に1頭分であれば文様があるものを中心となる箇所には、ないものはその周辺に飾っていたのではないかと考えられる。大室古墳群で無脚雲珠を含む装飾目的の馬具の出土数は少なく、この被葬者は古墳群の中でも上位の人物であったのではないだろうか。



↑写真1(上):大室古墳群第195号墳出土 無脚雲珠
 ↓図1(左):無脚雲珠実測図 大塚初重・小林三郎監修、佐々木憲一ほか(編)2015『信濃大室積石塚古墳群の研究IV—大室谷支群ムジナゴロ口単位支群の調査—報告篇』p.140より転載

- ※1 小野山節1977「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系・日本III 古墳時代』第3巻(第2版) 平凡社
- ※2 平安初期の禁中の年中儀式や制度などが記されている。

- 〔参考文献〕
- ・大塚初重・小林三郎監修、佐々木憲一ほか(編)2015『信濃大室積石塚古墳群の研究IV—大室谷支群ムジナゴロ口単位支群の調査—報告篇』明治大学文学部考古学研究会
 - ・小野山節1977「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系・日本III 古墳時代』第3巻(第2版) 平凡社
 - ・宮代栄一1986「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
 - ・宮代栄一1993「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
 - ・宮代栄一1998「無脚雲珠」の型式学的研究—その用途をめぐって—『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会

M2 カタログ

入荷しました！ ポストカード・クリアファイル

先生の味わい深いスケッチをご覧ください
スケッチポストカード

¥100

故・大塚初重
名誉教授の



図像化されたことわざ表現をお楽しみください
クリアファイル
(時田昌瑞ことわざコレクション)

¥100

絵が
コミカルで◎

※写真はイメージです

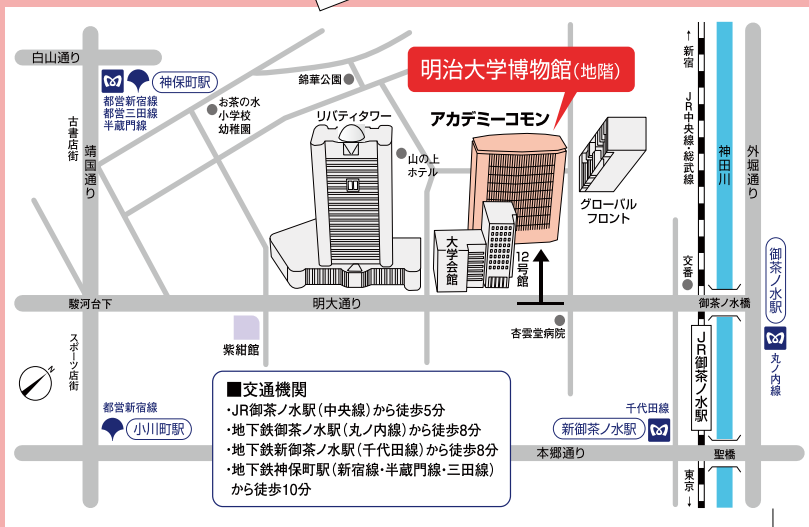
来館案内

展示室ご利用案内

- ◆ 開館時間
平日 10:00～17:00 (入館は16:30まで)
土曜 10:00～16:00 (入館は15:30まで)
- ◆ 休館日
日曜・祝日・11月1日・1月17日
冬季休業(12月26日～1月7日)
- ◆ 観覧料 無料

図書室ご利用案内

- 図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。
- ◆ 開室時間
平日 10:00～16:30
土曜 10:00～16:00



■ 交通機関
 ・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
 ・地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分
 ・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
 ・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

